

3/9 Thu.

第626回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.626 / Suntory Hall 19:00

指揮
Associate Conductor & Creative Partner
ヴィオラ
Viola
コンサートマスター
Concertmaster

鈴木優人
MASATO SUZUKI

ヴィトマン
WIDMANN

[休憩]
[Intermission]

シューベルト
SCHUBERT

鈴木優人 (指揮者／クリエイティブ・パートナー) -p.4
MASATO SUZUKI

アントワヌ・タメスティ -p.6
ANTOINE TAMESTIT

小森谷 巧
TAKUMI KOMORIYA

読響創立60周年記念委嘱作品
〈THE SIXTY〉(世界初演) [約12分] -p.8
YNSO 60th Anniversary Commissioned Work "THE SIXTY" (World Premiere)

ヴィオラ協奏曲 (日本初演) [約27分] -p.9
Viola Concerto (Japan Premiere)
I. Pizzicato, Molto rubato – Più mosso
– II. Sehr langsam – Calmo
– III. Poco vivo subito
– IV. Toccata, Presto
– V. Aria, Molto Adagio

交響曲 第5番 変ロ長調 D485 [約27分] -p.10
Symphony No. 5 in B flat major, D485
I. Allegro
II. Andante con moto
III. Menuetto: Allegro molto
IV. Allegro vivace

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)
文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：アフラック生命保険株式会社
※本公演では日本テレビ「読響プレミア」の収録が行われます。

3/17 Fri.

第8回 川崎マチネーシリーズ
ミュゼ川崎シンフォニーホール 14時開演
KAWASAKI MATINÉE SERIES No.8 / Muza Kawasaki Symphony Hall 14:00

指揮
Special Guest Conductor
ピアノ
Piano
コンサートマスター
Concertmaster

グリーグ
GRIEG

[休憩]
[Intermission]

チャイコフスキー
TCHAIKOVSKY

小林研一郎 (特別客演指揮者) -p.5
KEN-ICHIRO KOBAYASHI

仲道郁代 -p.6
IKUYO NAKAMICHI

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

ピアノ協奏曲 イ短調 作品16 [約30分] -p.11
Piano Concerto in A minor, op. 16
I. Allegro molto moderato
II. Adagio – III. Allegro moderato molto e marcato

交響曲 第4番 ヘ短調 作品36 [約44分] -p.12
Symphony No. 4 in F minor, op. 36
I. Andante sostenuto – Moderato con anima
II. Andantino in modo di canzona
III. Scherzo: Pizzicato ostinato. Allegro
IV. Finale: Allegro con fuoco

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)
文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：ミュゼ川崎シンフォニーホール (川崎市文化財団グループ)

指揮

鈴木優人

(指揮者／クリエイティブ・パートナー)

MASATO SUZUKI,
Associate Conductor & Creative Partner革命児マサトが
“クラシック音楽”を
今の時代に問う

©読響

はちめんろっぴ
八面六臂の活躍で音楽界の未来を切り開く革命児・鈴木優人が、自身の新作と
ヴィトマン、シューベルトの傑作を振り、刺激的な一夜を創出する。

1981年オランダ生まれ。東京芸術大学卒業および同大学院修了。オランダ・ハーグ王立音楽院修了。指揮者として国内外のオーケストラと共演するほか、鍵盤楽器奏者としても活躍している。音楽監督を務めるアンサンブル・ジェネシスでは、オリジナル楽器でバロックから現代音楽まで意欲的なプログラムを展開している。

2018年にバッハ・コレギウム・ジャパン (BCJ) の首席指揮者に就任。BCJオペラシリーズのプロデューサーを務め、20年のヘンデル〈リナルド〉は、バロック・オペラの新機軸として高く評価された。また、19年から世界的ヴィオラ奏者タメスティとのデュオでチェンバロを弾く「バッハ・プロジェクト」を開始し、ヴェルビエ音楽祭などに出演。昨年4月にはドイツ・ハンブルク響に客演し、5月にはグルック〈オルフェオとエウリディーチェ〉で新国立劇場に指揮者として初登場した。

作曲家としても活躍するほか、13年から調布国際音楽祭のエグゼクティブ・プロデューサーを務めている。NHK-FM「古楽の楽しみ」に出演中。齋藤秀雄メモリアル基金賞、芸術選奨文部科学大臣新人賞、渡邊暁雄音楽基金音楽賞など受賞多数。20年4月より読響の指揮者／クリエイティブ・パートナーを務め、多数公演を指揮するほか、《アンサンブル・シリーズ》をプロデュース。21年9月にはオルガニストとしても出演するなど活躍は多岐にわたる。九州大学客員教授。

指揮

小林研一郎

(特別客演指揮者)

KEN-ICHIRO KOBAYASHI,
Special Guest Conductor炎のマエストロ
入魂のチャイコフスキー

©読響

熱い音楽作りで絶大な人気を誇り、まもなく83歳を迎える“炎のマエストロ”。ますます円熟を深める世界的指揮者が、得意のチャイコフスキーを振り会場を熱狂へと誘う。

1940年福島県いわき市出身。東京芸術大学作曲科および指揮科を卒業。74年第1回ブダペスト国際指揮者コンクール第1位、特別賞を受賞。これまでハンガリー国立響の音楽総監督をはじめ、チェコ・フィル常任客演指揮者、日本フィル音楽監督など国内外の数々のオーケストラのポジションを歴任している。2002年5月の「プラハの春音楽祭」では、東洋人として初めて開幕コンサートに招かれ〈我が祖国〉全曲をチェコ・フィルと演奏し、絶賛された。ハンガリー政府よりリスト記念勲章、ハンガリー文化勲章、星付中十字勲章、ハンガリー文化大使の称号、そして20年3月には同国で最高位となるハンガリー国大十字功労勲章を授与された。国内では11年に文化庁長官表彰受賞、13年に旭日中綬章を受章、21年3月に恩賜賞・日本芸術院賞を受賞。チェコ、オランダでも文化を通じた国際交流や社会貢献に寄与し、長年にわたり重責を担ってきた。

現在、日本フィル桂冠名誉指揮者、ハンガリー国立フィル、名古屋フィルおよび群馬響の桂冠指揮者、九響名誉客演指揮者、名古屋フィル桂冠指揮者、東京芸術大学、東京音楽大学、リスト音楽院の名誉教授などを務めている。オクタヴィア・レコードなどから多数のCDをリリースしている。

3/9
定期

Artist



ヴィオラ

**アントワヌ・
タメスティ**

ANTOINE TAMESTIT, Viola

今、世界で最も活躍しているヴィオラ奏者。1979年パリ生まれ。ミュンヘン国際コンクールなど、4つの国際コンクールで優勝。バロックから現代作品まで幅広いレパートリーを誇り、ヴィトマン、エスケシュ、ノイヴィルトらの作品を世界初演している。ガーディナー、ラトル、ティーレマン、ロト、ハーディングらの指揮で、ウィーン・フィル、ボストン響、バイエルン放送響、ロンドン響、ドレスデン国立歌劇場管などと共演。ハルモニア・ムンディから数多くCDをリリースし、鈴木優人との「J.S. バッハ：ヴィオラ・ダ・ガンバ・ソナタ」は絶賛された。2013年から今井信子とともにヴィオラ・スペースの企画・プログラミングに携わっている。楽器は、ハビスロイティンガー・ストラディヴァリ財団より貸与された1672年製ストラディヴァリウス。読響初登場。

3/17

川崎マチネー

Artist

豊かな音楽性で人気、実力ともに日本を代表するピアニスト。日本音楽コンクール第1位、ジュネーヴ国際音楽コンクール最高位、エリザベート王妃国際コンクール入賞。ピッツバーグ響、バイエルン放送響、フィルハーモニア管、ドイツ・カンマーフィルなど海外の楽団とも共演多数。録音はレコード・アカデミー賞受賞作を含む「ベートーヴェン集成～ピアノ・ソナタ&協奏曲全集」「ドビュッシーの見たもの」ほか、著書には『ピアニストはおもしろい』などがある。ベートーヴェン没後200年に向け「仲道郁代The Road to 2027リサイタル・シリーズ」を展開中。音楽がヒラク未来代表理事、地域創造理事、桐朋学園大学教授、大阪音楽大学特任教授。2021年度文化庁長官表彰、文化庁芸術祭大賞を受賞。読響とは共演多数。



©Kiyotaka Saito

ピアノ

仲道郁代

IKUYO NAKAMICHI, Piano

鈴木優人

読響創立60周年記念委嘱作品〈THE SIXTY〉(世界初演)

12人の木管楽器奏者、11人の金管楽器奏者、ティンパニ、3人の打楽器奏者、そして33人の弦楽器奏者からなる、あわせて60人のオーケストラのための作品です。作品は3つのセクションに分かれています。

序奏部分は読売日本交響楽団が始まった60年前のオーケストラにおける創造力をイメージした「Genesis」。音響が入り乱れ、草創期の様々な指揮者や音楽家のスパークを音で表現します。

そして第2のセクションは「LX Anos」(=60年)と題され、読響の持つ持続力と力強さを表す部分です。「YOMIURI NIPPON SYMPHONY ORCHESTRA」の30文字を音列化した素材が60人の奏者によって異なる音価と音域で重なり合って表現されます。弦楽器はこの部分から一人一人異なるパートの演奏に分かれます。時折、様々な楽器によるソロが速いテンポで「読響音列」を奏でます。このセクションは、一年一年の歩みを表現する部分で、これまでの60年とこれからの60年、遠い未来へも脈々と受け継がれるオーケストラの伝統を表現しています。1小節がそれぞれの1年を表しており、オーケストレーションにはそれぞれの年がもつ数字の性質が用いられています。

そして第3のセクションは「YNSO」。現在の読響の輝かしさを表現する部分です。明るい三和音の重なりで、YNSOの文字が浮かび上がる作りになっています。短いソロで、再び読響の音列が奏でられ、曲は締めくくられます。

「読響」の60周年を記念する作品を書かせて頂くという創造的な作業は、指揮者／クリエイティブ・パートナーとして大変光栄なことです。この節目に作曲することで、社会の構造が劇的に変化していく中で、オーケストラという人間組織が今後どのように変容していくのか、考えることにつながりました。楽しんで頂けましたら幸いです。

鈴木優人 (指揮者／クリエイティブ・パートナー)

作曲：2023年／初演：2023年3月9日、サントリーホール／演奏時間：約12分

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(ウッドブロック、トムトム、サスペンデッドシンバル、木魚、グロッケンシュピール、ゴング、大太鼓、クロテイル、フレクサトーン、ムチ、小太鼓、シロフォン、銅鑼、ヴィブラフォン)、ヴァイオリン15、ヴィオラ8、チェロ6、コントラバス4

ヴィトマン

ヴィオラ協奏曲 (日本初演)

ドイツのクラリネット奏者イェルク・ヴィトマン(1973～)は、“人を食ったようなところのある作曲家”でもある。この「人を食う」というのは、どちらかと言えば「心地よい図々しさ」に近い。ヴィオラ協奏曲もまた、そんな「図々しい」作品のひとつである。作曲は2015年。同年10月にパリで世界初演を迎えた。ヴィトマンはこの作品を、初演独奏者のタメスティに献げた。

この協奏曲の立脚地は、協奏曲の概念を再検討する点にある。その自己言及を表現するため作曲家は、特殊奏法から演劇的手法まで、さまざまな工夫を曲に施した。とくに後者は注目に値する。

指揮者が指揮をしない、ヴィオラ奏者が舞台を歩き回る、その途中で独奏者は弓の存在に初めて気づく、バスフルートが唯一、独奏者の味方になる、管弦楽がヴィオラ奏者をおびやかす……。こうした身振りで協奏の概念に揺さぶりをかける。

曲は5つの部分からなるが、ひと続きに演奏される。冒頭のト書きには「指揮者は合図を出さない」とある。オーケストラに隠れていた独奏者が、おもむろにヴィオラから音をたてる。弓は持っていない。異様な様子に指揮者はいらつき、管弦楽は怪訝^{けげん}そうに应じる。独奏ヴィオラは弓奏以外の手段で延々と音を出し続ける。舞台を移動するうちに弓を見つけ、弓奏に転じる。

ヴィオラ同様、管弦楽に埋もれがちなバスフルートが、独奏の低音に寄り添う。やがて楽想は民族音楽風に。その後、対話相手をコントラバス、金管と代えながら、独奏が素早く前進するが、行き着くところまで行き着いて、とうとう“大爆発”する。

余勢を駆って走り抜けた独奏は指揮者の隣、つまり“普通”の位置に陣取り、瞑想的な旋律を、“普通”の協奏曲風に弾く。ハーモニクスで最高音に達した後、ヴィオラは徐々に音域を下げていく。最後に、糸巻きを緩めながら最低音弦を弓奏し、“息絶える(morendo：次第に弱く消え入るように)”。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：2015年／初演：2015年10月28日、パリ／演奏時間：約27分

楽器編成／フルート4(ピッコロ持替、アルトフルート持替、バスフルート持替)、クラリネット4(バスクラリネット持替、コントラバスクラリネット持替)、ファゴット4(コントラファゴット持替)、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、ボンゴ、トムトム、シンバル、サスペンデッドシンバル、チャイニーズシンバル、トライアングル、グロッケンシュピール、メタルチャイム、シロフォン、ヴィブラフォン、マリimba、銅鑼、鐘、ゴング、ウォーターゴング、ウォータータムタム、クロテイル、フレクサトーン、レインスティック)、ハープ2、ピアノ、チェレスタ、ヴァイオリン4、ヴィオラ3、チェロ3、コントラバス8、独奏ヴィオラ

シューベルト

交響曲 第5番 変ロ長調 D485

フランツ・シューベルト (1797～1828) は21歳までに、6つのシンフォニーを作曲した。いずれも「コンヴィクト」のオーケストラのために、もしくはハトヴィヒの私設管弦楽団のために書いたと言われる。

「コンヴィクト」とはウィーンにあった寄宿学校を指す。シューベルトは1808年、この学校に特待生として迎えらる。入学と同時に学校の管弦楽団にヴァイオリニストとして参加した。さらに、このオーケストラのために管弦楽曲を提供することも。1813年10月の交響曲第1番は在学中の作品で、この学生管弦楽団が初演したはずだ。

翌月、シューベルトはコンヴィクトを退学する。若き作曲家の音楽上の主戦場は以後、私設オーケストラへと移った。シューベルトが所属したのはオットー・ハトヴィヒの楽団だ。ハトヴィヒは当時、ウィーン・ブルク劇場のヴァイオリン奏者を務めていた。シューベルトはこの楽団のために管弦楽曲を書いていたとみて間違いはない。

第5番は1816年の作品。作曲直後にウィーンでハトヴィヒ楽団が初演したとされる。初期交響曲は楽器編成がまちまちで、第5番もクラリネット、トランペット、ティンパニを欠く。これは、私設オーケストラの団員が流動的だったことに起因する。

第1楽章 和弦的な短い序奏。下行音階に導かれながら主部へ。「長短短短長」韻律の第1主題が印象的。第2主題も「長+長短短短長」の形で第1主題と呼応する。〈グレート〉で頂点に達した韻律運用の芽生えが、ここに認められる。

第2楽章 跳躍気味にジグザグと進むモティーフは、第1楽章序奏の低音進行によく似ている。音程関係の共有で楽章間の連携を強める。

第3楽章 ト短調のメヌエット。モーツァルトの交響曲第40番の同様楽章を彷彿とさせる。

第4楽章 上行と下行が楽章内で拮抗しつつ曲を前進させる。階段を上り下りするような冒頭主題は、まさにその予告となっている。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1816年／初演：不明（1816年？）／演奏時間：約27分
楽器編成／フルート、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、弦五部

グリーグ

ピアノ協奏曲 イ短調 作品16

ノルウェーのエドヴァルド・グリーグ (1843～1907) は幼少時よりピアニストの母親からピアノを学び、15歳でライプツィヒの音楽院に留学した。音楽院生活はグリーグにとって退屈なものだったが、同地で開かれる演奏会は若き日のグリーグに豊かな音楽体験をもたらした。そのなかにはクララ・シューマンが夫ロベルトのピアノ協奏曲を弾いた演奏会も含まれていた。帰国後、グリーグはノルウェーの民族主義に目覚め、国民楽派の作曲家として自らの作風を確立させてゆく。

1868年、グリーグはデンマークを訪れ、友人でピアニストのエドムン・ネウベットらとともにコペンハーゲン郊外の田舎町に滞在し、穏やかな自然環境のもとでピアノ協奏曲の作曲に取り組んだ。ネウベットからの助言は大いに役立ったことだろう。翌年、作品を献呈されたネウベットの独奏によりコペンハーゲンにて初演が行われ、聴衆は嵐のような拍手で作品を歓迎した。

1870年にグリーグはこのピアノ協奏曲を持参してローマにリストを訪ねている。リストは初見で曲を演奏して称賛し、作曲者を温かく激励したと伝えられる。

第1楽章 アレグロ・モルト・モデラート ティンパニのクレッシェンドに導かれ、滝が流れ落ちるようなパッセージを独奏ピアノが奏でる。同じイ短調で書かれたシューマンのピアノ協奏曲を少なからず連想させる。

第2楽章 アダージョ 弱音器を付けた弦楽器が瞑想的な主題を奏でる。憧憬に満ちたホルンのソロに、優美で装飾的な独奏ピアノが続く。

第3楽章 アレグロ・モデラート・モルト・エ・マルカート 行進曲調の短い前奏に続いて、民族舞曲風の情熱的な主題が力強く奏でられる。フルートのソロに導かれて抒情的な楽想がくりひろげられた後、ふたたび民族舞曲風の主題が戻り、雄大なクライマックスを築く。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1868年、1906～07年他、数度にわたり改稿／初演：1869年4月3日、コペンハーゲン／演奏時間：約30分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ（使用楽器：ヤマハコンサートグランドピアノCFX）

チャイコフスキー

交響曲 第4番 ヘ短調 作品36

作曲家が作曲だけで生計を立てるのは容易ではない。多くは作曲活動のかたわら、演奏家として舞台に立ったり、教職を務めているもの。ところがロシアのピョートル・チャイコフスキー（1840～93）は巨万の富を有するパトロンのおかげで作曲活動に専念する幸運を手に入れた。

鉄道王の夫より多額の財産を相続した音楽愛好家ナジェージダ・フォン・メックは、まずは編曲の仕事を通じてチャイコフスキーを支援した。1877年、チャイコフスキーはメック夫人に借金を申し込み、これから書く交響曲を捧げたいと提案する。しかしメック夫人は金銭を渡しても返済は断った。借金を負わせるのは偉大な才能にふさわしくないと考えたのだろう。以後、無償の援助が続けられ、チャイコフスキーは創作活動に打ち込む自由を手に入れた。こうして書きあげられた交響曲第4番はメック夫人に献呈され、78年に初演された。奇妙なことに、二人は生涯に700通以上もの手紙を交わし、特別な友情と信頼関係を育みながら、直接会おうとはしなかった。対面することで互いの関係性に変化が起きることを嫌ったのだろうか。

第1楽章 アンダンテ・ソステヌート～モデラート・コン・アニマ 冒頭のホルンとファゴットによる決然としたファンファーレは、作曲者によれば「運命。幸福の実現を妨げる不吉な力」。序奏に続いて弦楽器が暗鬱な主題を奏で、緊迫感あふれる楽想が展開される。

第2楽章 アンダンティーノ・イン・モード・ディ・カンツォーナ オーボエによる物悲しい旋律で開始される。中間部分で一筋の光が差し込むが、ふたたび冒頭主題が帰り、打ちひしがれたようなムードが支配する。

第3楽章 スケルツォ ピッツィカート・オスティナート、アレグロ 弦楽器によるピッツィカート（弦をはじく奏法）が特徴的。気まぐれでユーモラス。

第4楽章 フィナーレ アレグロ・コン・フォーコ シンバルの一撃とともに盛大に開始され、ロシア民謡由来の主題を交えながら熱狂的なフィナーレを築く。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1877～78年1月9日／初演：1878年2月22日、モスクワ／演奏時間：約44分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル、大太鼓、シンバル）、弦五部